

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学	分野	看護学
学籍番号	18S3065	院生氏名	横山 ひろみ
通学キャンパス	赤坂		
論文題目	私立看護系大学教員の離職意向の影響要因		
審査結果(枠で囲む)	合格		不合格
<p>< 審査結果の要旨 ></p> <p>1. 主論文 1) 研究の概要: 研究目的は、私立看護系大学教員の離職意向の影響要因を明らかにする。 2) 研究方法: 文献検討、研究1目的: 私立看護系大学教員の仕事における困難感を明らかにする。研究デザイン: 無記名自記式質問紙調査。対象者: 関東圏内にある私立看護系大学18校の私立看護系大学に依頼。結果: 14校看護系大学447人に調査紙を配布、困難感が記載されている97人(有効回答率21.7%)を分析(男性6人、女性91人)。平均年齢45.5±8.1歳、現在の職場在職期間4.0±3.4年。職位教授3人、准教授15人、講師32人、助教34人、助手13人。仕事における困難感12説明変数を抽出。研究2目的: 私立看護系大学教員の離職意向の影響要因を明らかにする。研究デザイン: 前向きコホート研究(自記式質問紙調査)。対象者: ベースライン調査: 2019年7月~9月。全国私立看護系大学159校のうち了解が得られた93校2931名に依頼しコホートを設定。追跡調査: ベースライン調査有効回答者の6か月後離職意向を評価。結果: ベースライン調査有効回答者929名、追跡可能者586名から男性を除外した512名を分析。教員全体離職意向の最も高い影響要因はバーンアウトであった。離職意向が高かったのは、大学の職員処遇に対する不公平感を感じている者、上司から権力によるハラスメント行為を受け苦しかった経験をもつ者、講義や実習の担当が多く、体調が悪くても休むことができないときつかった経験をもつ者、職場以外の友人に相談している者、同僚との人間関係に困難を感じた者であった。離職意向が低い者は、現在の職場はオープンな話し合いができる雰囲気があると感じている者、よく眠れている者、仕事に満足感を感じている者、キャリアコミットメントが高い者、仕事で困った時職場で支援を受けることができていると感じている者であった。教員全体と准教授~助教の影響要因は類似していた。准教授~助教のみの離職意向の影響要因は、上司の意見が二転三転し、一貫性がない時に困った経験をもつ者であった。上司に相談している者は離職意向が低い傾向がみられた。教授の離職意向の影響要因は、同僚に相談している者は離職意向が低い。助手の離職意向の影響要因は、1ヶ月の休暇の日数が多い者、看護教育に興味があり教員になった者は離職意向が高く、現在の職場は教員の人数が十分満たされていると感じている者は離職意向が低かった。本研究は、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認(研究1: 承認番号18-1g-94、研究2: 承認番号19-1g-22)を得て実施している。</p> <p>3) 知見の新規性と価値: 私立系看護大学教員の離職意向の影響要因を分析した研究は無いことから新規性のある研究と言える。また、本研究で得られた結果を活用し、私立系看護大学教員の離職者減少に向けて貢献可能な研究であり、価値のある研究と考える。</p> <p>2. 審査経過: 審査会は、12月7日に1回開催した。審査員からは、対象者を私立系看護大学にした根拠、看護系大学教員は他分野の教員と比べ離職が多い理由、目的変数を退職者(離職者)にした方が良いのではないかと、大学の規模(単科大学、総合大学)による違いはあるのか等の質問があった。本研究結果を今後私立系看護大学教員の離職者を減少に向けた取り組みに活かして欲しいとの助言をした。12月21日提出の修正論文において、審査員の助言内容を適切に修正・反映されていることを確認した。</p> <p>3. 口頭試問の結果: 12月7日に実施した口頭試問において、問いに対し適切に回答していた。</p> <p>4. 以上の結果から、審査会の審査員全員が本論文を博士(看護学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	主査	佐藤 真由美	
	副査	稲垣 誠一	
	副査	横島 啓子	